レントゲン藝術研究所とは何か
—資料アーカイブの実践とその考察—

女子美術大学博士前期課程
美術研究科デザイン専攻
アートプロデュース領域
鈴木萌夏

本研究は1991年から1995年まで存在した画廊、レントゲン藝術研究所について過去の資料の分析を通じてその活動を明らかにし、90年代の日本のアートシーンにおける位置付け、役割を検証することを目的としている。
2017年から2020年にかけて行なってきたリサーチプロジェクトに基づき、考察した結果を冊子にまとめた。さらに修了制作展ではその冊子をもとに、リサーチプロジェクトの研究報告として発表する。本稿【プロジェクト報告「レントゲン藝術研究所とは何か—資料アーカイブとその考察—」】はそのサマリーとして作成したものである。

■前提の確認

1. 研究対象

レントゲン藝術研究所は、1991年に東京・大森東にオープンした。レントゲン藝術研究所として活動していた約5年間のうち企画した展覧会はコレクション展なども加えるとその数は約40にもなる。さらに画廊としてアートフェアなどにも積極的に参加し、アートマーケットの最前線でコレクターと作家を繋げる橋渡しをしてきました。それだけでなく、時には会場をアトリエとして貸し出して作家の活動をサポートし、共に新たな表現を模索した。レントゲン藝術研究所は1995年12月をもって閉鎖されるが、その後「レントゲンクンストラウム」「レントゲンコンプレックス」「ラディウム-レントゲンヴェルケ」「レントゲン藝術研究所準備室」と名前を変え、現在も活動している。本研究はあくまでも1991年から1995年までのレントゲン藝術研究所の活動を対象とし、調査を行った。

2. 時代背景

レントゲン藝術研究所がオープンした当時はどのような状況下であったのだろうか。東京都現代美術館は日本の戦後美術を中心に、国内外の現代美術を体系的に研究、収集、保存、展示するための機関として1995年3月に開館した。それ以前に関東圏で、現代美術を取り扱っていた公立美術館は1986年にオープンした世田谷美術館、1989年の横浜美術館、1990年の水戸芸術館などがある。また私立美術館は財団法人（現・公益財団法人） を母体として1979年に開館した原美術館、1985年に西武流通グループの堤清二によって創立された西武美術館、株式会社ワコールの文化事業の拠点として1985年にオープンしたスパイラル、高級エステートを専門に手掛けていた東高不動産が設立した東高現代美術館などが挙げられる。また販売などを行うギャラリーでは、1970年にフジテレビタワービル1階に開廊し、草間彌生の個展などを開催したフジテレビギャラリー、1983年に江東区にオープンし、森村泰昌、内藤礼、大竹伸朗、杉本博司など多数のアーティストを輩出した佐賀町エキシビットスペースなどがある。上記のように現代美術を紹介するスペースはなくはなかったが、それらが取り扱っているのは海外のアーティストや国内であっても著名な作家が中心。若手作家が自らの作品を展示する場所といえば、1週間の賃料が数十万円とかかる、銀座などに多く存在した貸画廊がほとんどだった。そのような状況の中、当時、東京藝術大学大学院博士後期課程に在籍中だった村上隆や、同大学修士課程を修了した会田誠、小沢剛ら若手作家の作品を積極的に展示していたのがレントゲン藝術研究所だったのだ。レントゲン藝術研究所以外にもICA名古屋（1986-1989） 、P-HOUSE（1995-2000）、現代美術製作所（1997-2016）、西村画廊（1974-）、ギャラリー360°（1982-）、白石コンテンポラリーアート（1989-）、ワコウ・ワークス・オブ・アート（1992-）、SCAI THE BATHHOUSE（1993-）、オオタファインアーツ（1994-）、ミヅマアートギャラリー（1994-）、小山登美夫ギャラリー（1996-）などがある。それらの中でも「伝説」的に扱われているレントゲン藝術研究所（1991-1995）でさえ、その活動の記録は公開されておらず、研究や調査もされていない。

3. 研究方法

本研究ではレントゲン藝術研究所準備室より寄託された一次資料の分析を通して「レントゲン藝術研究所とは何か」を考察する。寄託資料とは、レントゲン藝術研究所が所有していたもので、2018年11月まで多摩美大学芸術文化人類学研究所に保管され、その後、本研究に伴いレントゲン藝術研究所準備室へ返還された。資料の内容は研究領域外のものも含まれていたが、レントゲン藝術研究所に関する資料だけでも、VHSが98本、展覧会記録写真（ポジフィルムが主）が収められたファイルが20冊で写真数は約15000枚、その他、紙資料の入った封筒が24通あった。それらの資料は、何度も当事者によって整理を試みられたが、最後までまとめられ、検証されることはなかった。そのため、筆者は修士課程に進学し、これらの資料の分析をすることにした。しかし、資料には欠けている部分が多く存在するため、書籍等の二次資料や関係者へのインタビューを行うことで資料の補完を試みた。これによって、今日では顧みられることの少ない、レントゲン藝術研究所の活動を浮き彫りにすることができると考える。

■リサーチプロジェクト
レントゲン藝術研究所の研究

このプロジェクトは３つに分けることができる。

①資料アーカイブ→インタビュー

レントゲン藝術研究所準備室より寄託された展覧会企画資料、印刷物、写真、ビデオ等の一次資料および書籍等の二次資料の調査を行い、当事者であるレントゲン藝術研究所ディレクターを務めた池内務氏、キュレーターの黒沢伸氏（前・金沢21世紀美術館副館長）、評論家の西原珉氏、アーティストの会田誠氏、小沢剛氏、八谷和彦氏の6名へのインタビューを行い、一次資料の補完を試みた。

②資料アーカイブ→展覧会

資料の調査結果を展覧会で発表を行った。これまでに2つの展覧会を開催している。
1つは、2019年1月18日-29日に女子美術大学卒業制作展内で開催した資料展である。これは株式会社レントゲンヴェルケの所有していた一次資料（紙焼き写真や展覧会DM、ポスターなど）を調査し、資料の解説を付け、2018年に行った池内務氏へのインタビュー映像、1991年から1995年の年表などと共に展示した。2つは、2019年6月にラディウムーレントゲンヴェルケ （現在はは移転したため馬喰町には存在しない）行った作品展である。筆者によるキュレーションのもと、レントゲン藝術研究所内で展示された作品を集めた展覧会を開催した。

③資料アーカイブ→ZINE

過去の資料の分析結果と関係者へのインタビューをまとめ、制作した活動報告書である。これはZINEという形で発表し、資料のアーカイヴを目的として制作した。 本研究はレントゲン藝術研究所の活動の全体像を明らかにすることを第一の目標としているが、同時に本研究を通して、これからの現代美術に有効に働くことを目標としている。レントゲン藝術研究所で池内が同世代の若手作家とともに新たな表現を「研究」したように、筆者の活動において、同世代へ研究結果を共有することで新たな発見があるのではないかと考えるようになった。そこで、これまでの研究報告をまとめたZINEを作成することにした。現在までに、4冊発行している。

リサーチプロジェクトについての報告書はこれまでに2つの論考を発表した。1つが女子美術大学研究紀要第51号に発表予定のもので、上記3つのプロジェクトについての報告を行った。2つが今回修了するにあたり執筆したもので、プロジェクト結果「レントゲン藝術研究とは何か」ということからプロジェクトを通して新たに見つけた問題点「展覧会という表現のアーカイブ」について考察した。次頁が、修了するにあたり提出した論考の目次である。

『レントゲン藝術研究所とは何か―資料アーカイブの実践とその考察―』

・はじめに
・第1章　前提の確認
1-1.課題設定
1-2.研究目的
1-3.研究対象：レントゲン藝術研究所について
1-4. 研究方法
1-5. 現代美術史における1990年代の先行研究
1-6. 画廊史に関する先行研究
・第2章　時代背景
2-1. 現代美術を取り扱う公立美術館
2-2. 現代美術を取り扱う私立美術館
2-3. 現代美術を取り扱う画廊
2-4. 貸画廊問題
2-5. 現代美術を取り扱うオルタナティブ・スペース
・第3章 レントゲン藝術研究所のあゆみ
3-1. 古美術池内から池内美術へ
3-2. 画廊名とコンセプト
3-3. レントゲン藝術研究所の場所
3-4. レントゲン藝術研究所の内部構造
・第4章 画廊としてのレントゲン藝術研究所
4-1. 「画廊」の定義
4-2. 企画展
4-3. アートフェアへの参加
・第5章 オルタナティブ・ギャラリーとしてのレントゲン藝術研究所
5-1. 実験室としての展覧会スペース
5-2.オープニングパーティーの様子
5-3. 出版物・デザイン
・おわりに：展覧会という表現